
【研究論文】

英語の強勢について（その 8）

On English Stress（8）

田 中 章
Akira TANAKA

次は（124b）のinflammationであるが、派生は次のようになる。¹¹

（127）inflammation

Line 0	Project:L	(x	(x	(x	x	(x # Avoided
		H	H	H	H	Avoid (x (OR (twice)
	Edge:LLL	vacuous				
	Head:L	x	x	x		
		(x	(x	(x	x	
		H	H	H	H	
Line 1	SC	vacuous				
	Edge:RRR	x	x	x)		
		(x	(x	(x	x	
		H	H	H	H	
	Head:R			x		
		x	x	x)		
		(x	(x	(x	x	
		H	H	H	H	

Line 2	SE	x		x	
		x	x	x)	
		(x	(x	(x	x
		H	H	H	H
	Edge:RRR	x		x)	
		x	x	x)	
		(x	(x	(x	x
		H	H	H	H
	Head:R			x	
		x		x)	
		x	x	x)	
		(x	(x	(x	x
		H	H	H	H
	SOSW			x	
		x		x)	
		x	x	x)	
		(x	(x	(x	x
		H	L	H	H

この派生で注意すべき事は、語末から三番目の音節が基底では長音節であり、派生の最後に短母音にしなくてはならないということである。あとは他の語の派生と同じになる。語頭の音節、語末から二番目の音節および語末の音節が重音節なので、Projet:Lが適用されるが、その際、回避制約 (Avoid (x #)) により語末の音節には適用されない。また、回避制約 (Avoid (x ()) は二度無視される (overridden)。Edge:LLLは空虚に適用される。このようにして生じた3個の構成素の主要部を示すためにHead:Lが適用される。line 1ではまず、SCが空虚に適用される。次に、line 0で生じた3個の主要部のうち、どれが主強勢を担うかを示すために、Edge:RRRとHead:Rが適用される。さらに、line 2では、語頭の従属強勢の方が語頭から二番目の従属強勢よりも強いのでSEを適用する必要がある。さらにEdge:RRRとHead:Rが適用される。最後にSOSWが適用されて正しいアクセントが生成される。SDは適用されないことに注意。

次は、(124b) のcôndémnationを扱うが、派生は次のようになる。

(128) còndèmnation

Line 0 Project:L (x (x (x x (x # Avoided
 H H H H Avoid (x (OR (twice)

Edge:LLL vacuous

ICC:L irrelevant

Head:L x x x
 (x (x (x x
 H H H H

Line 1 SC vacuous

Edge:RRR x x x)
 (x (x (x x
 H H H H

Head:R x
 x x x)
 (x (x (x x
 H H H H

Line 2 SE x x
 x x x)
 (x (x (x x
 H H H H

Edge:RRR x x)
 x x x)
 (x (x (x x
 H H H H

Head:R				x
	x			x)
	x	x		x)
	(x	(x	(x	x
	H	H	H	H

この派生で注意すべき事は、語末から三番目の音節は (120b) の *clàssificátion*、*inflammátion* とは異なり、派生の最初から最後まで単音節なので、SやSOSWは適用されないということである。

2.1.9. 強勢領域で説明された語の場合

次に、HVで「強勢領域 (Stress Domain)」をなす接頭辞を含む次のような語について考えてみる。

(129) (= HV, p. 254, (58))

a. <i>álkalòid</i>	<i>hóminòid</i>	<i>céllulòid</i>
<i>aráchnòid</i>	<i>ellípsòid</i>	<i>mollúscòid</i>
b. <i>dýnamìte</i>	<i>mágnètìte</i>	<i>molýbdenìte</i>
<i>stalágmìte</i>	<i>staláctìte</i>	<i>smarágdìte</i>
c. <i>inhíbìtòry</i>	<i>admónìtòry</i>	<i>sécretàry</i>
<i>perfúntòry</i>	<i>reféctòry</i>	<i>èleméntary</i>

最初に (129a) の *álkalòid* であるが、派生は次のようになる。

(130) *álkalòid*

Line 0	Project:L	(x	x	(x	Avoid (x # OR
		H	L	H	
	Edge:LLL	vacuous			
	Head:L	x		x	
		(x	x	(x	
		H	L	H	

Line 1	Edge:LLL	(x		x
		(x	x	(x
		H	L	H
	Head:L	x		
		(x		x
		(x	x	(x
		H	L	H

この派生では、語頭と語末の音節が重音節であるのでProject:Lが適用されるが、その際、回避制約（Avoid (x #)）は無視される（overridden）。Edge:LLLは空虚に適用される。このようにして生じた2個の構成素の主要部を示すため、Head:Lが適用される。line 1ではline 0で生じた2個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すためにEdge:LLLとHead:Lが適用されて正しいアクセントが生成される。したがって、本稿の枠組みではHVの強勢領域をなす接尾辞という概念を用いずに、いままでの他の例と同じように扱うことができる。

次は（129a）のhóminòidを扱うが、派生は次のようになる。

（131）hóminòid

Line 0	Project:L	x	x	(x	Avoid (x # OR
		L	L	H	
	Edge:LLL	(x	x	(x	
		L	L	H	
	Head:L	x		x	
		(x	x	(x	
		H	L	H	
Line 1	Edge:LLL	(x		x	
		(x	x	(x	
		H	L	H	

Head:L	x		
	(x		x
	(x	x	(x
	H	L	H

この派生では、語末の音節のみ重音節であるのでProject:Lが適用されるが、その際、回避制約 (Avoid (x #) は無視される (overridden)。それから語頭の音節にもアクセントが付与されるので Edge:LLLが適用される。このようにして生じた2個の構成素の主要部を示すため、Head:Lが適用される。line 1ではline 0で生じた2個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すために Edge:LLLとHead:Lが適用されて正しいアクセントが生成される。cèllulòidの派生も hóminòidの派生と全く同じになる。

次は、(129a) のaráchnòidであるが、派生は次のようになる。

(132) aráchnòid

Line 0	Project:L	x	(x	(x	Avoid (x # OR
		L	H	H	Avoid (x (OR

Edge:LLL need not apply

Head:L		x	x
	x	(x	(x
	L	H	H

Line 1	Edge:LLL		(x	x
		x	(x	(x
		L	(H	H

Head:L		x	
		(x	x
	x	(x	(x
	L	H	H

この派生では、語頭から二番目の音節と語末の音節が重音節であるのでProject:Lが適用されるが、その際、二つの回避制約 (Avoid (x #) と (Avoid (x () は無視される (overridden)。それから

語頭の音節にはアクセントは付与されないのでEdge:LLLを適用する必要はない。このようにして生じた2個の構成素の主要部を示すため、Head:Lが適用される。line 1ではline 0で生じた2個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すためにEdge:LLLとHead:Lが適用されて正しいアクセントが生成される。(129a) のellípsòidとmollúscòidの派生はaráchnòidの派生(132)と全く同じになる。

次は、(129b) のdýnamiteとmáagnetiteであるが、派生は(129a) のáikalòidの派生(130)と全く同じになる。

次は(129b) のmolýbdeniteを扱うが、派生は(133)のようになる。

(133) molýbdenite

Line 0	Project:L	x	(x	x	(x	Avoid (x # OR
		L	H	L	H	
	Edge:LLL	need not apply				
	Head:L		x		x	
		x	(x	x	(x	
		L	H	L	H	
Line 1	Edge:LLL		(x		x	
		x	(x	x	(x	
		L	H	L	H	
	Head:L		x			
			(x		x	
		x	(x	x	(x	
		L	H	L	H	

この派生では、語頭から二番目の音節と語末の音節が重音節であるのでProject:Lが適用されるが、その際、回避制約 (Avoid (x #) は無視される (overridden)。それから語頭の音節にはアクセントは付与されないのでEdge:LLLを適用する必要はない。このようにして生じた2個の構成素の主要部を示すため、Head:Lが適用される。line 1ではline 0で生じた2個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すためにEdge:LLLとHead:Lが適用されて正しいアクセントが生成される。(129b) のstalágmite、staláctite、smarágditeの派生は(129a) のaráchnòidの派生(132)と全く同じになる。

次は (129c) の inhibitory であるが、派生は (134) のようになる。¹²

(134) inhibitory

Line 0	Project:L	(x	x	x	(x	x	
		H	L	L	H	L	
	Edge:LLL	vacuous					
	ICC:L	(x	(x	x	(x	x	Avoid (x (OR
		H	L	L	H	L	
	Head:L	x	x		x		
		(x	(x	x	(x	x	
		H	L	L	H	L	
Line 1	SC	vacuous					
	Edge:LRL	x	(x		x		
		(x	(x	x	(x	x	
		H	L	L	H	L	
	Head:L		x				
		x	(x		x		
		(x	x	x	(x	x	
		H	L	L	H	L	
	SD		x				
			(x		x		
		x	(x	x	(x	x	
		H	L	L	H	L	

この派生では、語頭の音節と語末から二番目の音節が重音節であるのでProject:Lが適用される。それからEdge:LLLは空虚に適用される。次に語頭から二番目の音節にアクセントが付与されるのでICC:Lが適用される。このようにして生じた3個の構成素の主要部を示すため、Head:Lが適用さ

れる。line 1では、まずSCが空虚に適用される。次にline 0で生じた3個の主要部のうち、どれが主強勢を担うかを示すためにEdge:LRLとHead:Lが適用される。さらに、語頭の音節にSDが適用されて正しいアクセントが生成される。(129c)のadmónitòryの派生も(129c)のinhíbìtòryの派生(134)と全く同じになる。

次は(129c)のsécrotàryであるが、派生は次のようになる。

(135) sécrotàry

Line 0	Project:L	x	x	x	x
		L	L	L	L
	Edge:LLL	(x	x	x	x
		L	L	L	L
	ICC:L	(x	x	(x	x
		L	L	L	L
	Head:L	x		x	
		(x	x	(x	x
		L	L	L	L
Line 1	Edge:LLL	(x		x	
		(x	x	(x	x
		L	L	L	L
	Head:L	x			
		(x		x	
		(x	x	(x	x
		L	L	L	L

この派生では、すべての音節が軽音節であるのでProjet:Lは適用されない。次に語頭の音節にアクセントが付与されるため、Edge:LLLが適用される。また、語末から二番目の音節にもアクセントが付与されるため、ICC:Lが適用される。このようにして生じた2個の構成の主要部を示すためHead:Lが適用される。line 1ではline 0で生じた2個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すため、Edge:LLLとHead:Lが適用されて正しいアクセントが生成される。この派生で注意すべき

事は、HVとは異なり、本稿では接尾辞-aryは基底でアクセントがあるとしなくて、line 0でICC:LとHead:Lの適用により主要部を持ち、派生の途中で従属強勢を持つとすることである。以下の接尾辞-oryを持つ語についても同じことがあてはまる。

次は、(129c) のperfúntoryを扱うが、派生は (136) のようになる。¹³

(136) perfúntory

Line 0	Project:L	x	(x	(x	x	Avoid (x (OR
		L	H	H	L	
	Edge:LLL	need not apply				
	ICC:L	irrelevant				
	Head:L		x	x		
		x	(x	(x	x	
		L	H	H	L	
Line 1	Edge:LLL		(x	x		
		x	(x	(x	x	
		L	H	H	L	
	Head:L		x			
			(x	x		
		x	(x	(x	x	
		L	H	H	L	
	S		x			
			(x	x		
		x	(x	(x	x	
		L	H	L	L	
	SD			x		
				(x		
			x	(x	x	x

L H L L

この派生では、語頭から二番目の音節と語末から二番目の音節が重音節であるのでProject:Lが適用される。その際、回避制約 (Avoid (x () は無視される (overridden)。次に語頭の音節にはアクセントが付与されないため、Edge:LLLを適用する必要はない。また、ICC:Lはirrelevantである。このようにして生じた2個の構成の主要部を示すためHead:Lが適用される。line 1ではline 0で生じた2個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すため、Edge:LLLとHead:Lが適用される。次に語末から二番目の音節を短音にするSが適用される。最後に、SDが適用されて正しいアクセントが生成される。(129c) のrefectoryも (129c) のperfúctoryの派生 (136) と全く同じになる。

次は (129c) のèleméntaryであるが、派生は (137) のようになる。

(137) èleméntary

Line 0	Project:L	x	x	(x	x	x	
		L	L	H	L	L	
	Edge:LLL	(x	x	(x	x	x	
		L	L	H	L	L	
	ICC:L	(x	x	(x	(x	x	Avoid (x (OR
		L	L	H	L	L	
	Head:L	x		x	x		
		(x	x	(x	(x	x	
		L	L	H	L	L	
Line 1	Edge: LRL	x		(x	x		
		(x	x	(x	(x	x	
		L	L	H	L	L	
	Head:L			x			
		x		(x	x		
		(x	x	(x	(x	x	
		L	L	H	L	L	

SD		x			
	x		(x		
(x	x	(x	x	x	
L	L	H	L	L	

この派生では、語末から三番目の音節が重音節であるのでProjet:Lが適用される。次に語頭の音節にもアクセントが付与されるため、Edge:LLLが適用される。次にICC:Lが適用されるが、その際、回避制約 (Avoid (x () は無視される (overridden)。このようにして生じた3個の構成素の主要部を示すためHead:Lが適用される。line 1ではline 0で生じた3個の主要部のうち、どれが主強勢を担うかを示すため、Edge:LRLとHead:Lが適用される。次に語末から二番目の音節を無強勢にするSDが適用されて正しいアクセントが生成される。この派生で注意すべきことは、接尾辞-aryには (129c) の3語と同様にアクセントがあるとしており、最後にSDが適用されるということである。

次に、HVが、困難な例であるとした (138) と (139) のような例について考察する。

(138) (= HV, p. 255, (59))

a. ànticipatòry	àrticulatòry	gèsticulatòry
b. confiscatòry	compensatòry	observatòry
c. defamatòry	explanatòry	declaratòry
d. respiratòry	pacificatòry	obligatòry
e. approbatòry	vibratòry	rotatòry

(139) (= HV, p. 255, (60)) ¹⁴

a. agglutinative	imaginative	associative	commemorative
b. innovative	qualitative	legislative	authoritative
c. derivative	provocative	exclamative	declarative
alternative	informative	conservative	sedative

(その9へ)

注

11 inflammátionのアクセントはHV, p. 240の (36) inflammátionよりも詳しいものとなっていることに注意。HV, p. 250, (55)

参照。

- 12 (134) から (137) までにおいて接尾辞-ory/-aryは、HVでは「単音節であり、末尾の[iy]は基底では滑脱音 (glide) である...」とされるが (p. 257)、派生の説明を容易にするため、本稿では最初から2音節であるとしておく。
- 13 接尾辞-oryの母音は長母音であるが、Kenyon & Knott(1953)⁴ やWeb³ では短音として示されているので、派生の途中で「短音化 (shortening)」が適用されるものとする。
- 14 Kenyon & Knott (1953)⁴ は、(139) の語の中でimáginativeについてのみimáginàtiveという発音もあげている。この発音についての派生は後で示すことにする。

参考文献（追加）

- | | | | |
|---------------|------|---------|---------|
| （その1）新潟経営大学紀要 | 第14号 | 2008年3月 | 37頁～53頁 |
| （その2）新潟経営大学紀要 | 第15号 | 2009年3月 | 15頁～29頁 |
| （その3）新潟経営大学紀要 | 第16号 | 2010年3月 | 13頁～25頁 |
| （その4）新潟経営大学紀要 | 第17号 | 2011年3月 | 9頁～21頁 |
| （その5）新潟経営大学紀要 | 第18号 | 2012年3月 | 1頁～15頁 |
| （その6）新潟経営大学紀要 | 第20号 | 2014年3月 | 3頁～16頁 |
| （その7）新潟経営大学紀要 | 第21号 | 2015年3月 | 1頁～14頁 |

